



2016年
1月25日
No. 146

2016 年度 東京蜘蛛談話会総会例会

1. 日時 2016年4月24日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩3分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター, OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材(スライド, OHP, コンピュータ)を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8 コンフィデンス高垣 105
有限会社エコシス 初芝伸吾
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

●錦糸町駅南口から徒歩3分です。



東京蜘蛛談話会 2015 年度採集観察会

1. 期 日： 第 4 回 2016 年 2 月 21 日（日）
2. 場 所： 神奈川県秦野市渋沢丘陵
午前中は水田、水路周辺 午後は丘陵の林内
3. 集 合： 集合 10：00 小田急線渋沢駅改札口
4. 世話人： 水山栄子
携帯電話：090-6143-6942

東京蜘蛛談話会 2016 年度採集観察会

1. 期 日： 第 1 回 2016 年 5 月 15 日（日） 第 2 回 2016 年 7 月 10 日（日）
第 3 回 2016 年 10 月 16 日（日） 第 4 回 2017 年 2 月 19 日（日）
2. 場 所： 東京都町田市 芹ヶ谷公園
3. 集 合： 集合 10：00
小田急線町田駅西口の正面 「特急券うりば」前
芹が谷公園は町田駅から徒歩 10 分
(町田駅を北上し町田街道 47 号線を越える)
4. 世話人： 池田博明
携帯電話：090-9670-1525
5 月の予定：芹が谷公園西口から入り、管理事務所付近で昼休み。
その後、国際版画美術館方面へ東口まで。

入退会は：事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス

E-mail：hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 2000 円、学生 1000 円です。
**(会計状況の好転により、2015 年度分より当分の間、会費を値下げし、
年会費を一般会員 2000 円、学生会員 1000 円とします。)**

会費は郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 須黒達巳

〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂 1-39-6

TEL：080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

※談話会の会費は前納制となっております。本号に請求書と振込用紙を同封
いたしましたので来年度分までの会費の納入をお願いいたします

東京蜘蛛談話会例会

2015年12月6日 東京環境工科専門学校にて
参加者一同



(1) 電子顕微鏡でみたクモの微細構造(17)
—篩板類の出糸管—

梅林 力



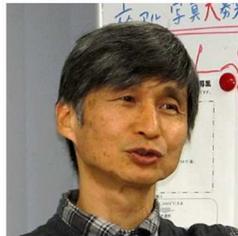
(2) 白と黒がいる

須黒達巳



(3) 埋立地へ行こう！ 夢の島はワンダーランド

安藤昭久



(4) 曖昧検索凶鑑の構想，ネットでお気軽クモ検索

安藤昭久



(5) 文献リストから読むクモの発生活長

新海 明
(代理谷川明男)



(6) 沖縄の話 2015

谷川明男



(7) 雪上のクモ

林 俊夫



(8) クモの話題3つ
(チェコ, インドなど)

小野展嗣



「セアカゴケグモと外来種」写真展見学記

池 田 博 明

新海栄一さんの写真展「セアカゴケグモと外来種～その毒性と生態を探る～」(セアカゴケグモ発見20年特別展)が国分寺市のシンカイ写真館に併設された「こくぶんじ画廊」で開催されました(2015年12月1日から20日まで)。12月15日に見学してきました。

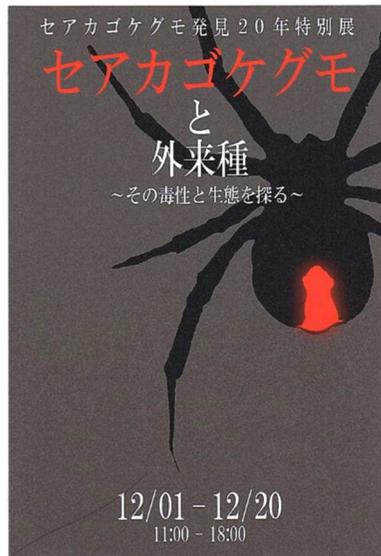
画廊の広さは十坪くらいでしょうか。写真が「ゴケグモ発見のとき」「ゴケグモ類の生態」「有毒とされたクモ」「セアカゴケグモのいる場所」「外来種」などのテーマに分けて展示されていました。もっとも、テーマ板があるわけではありません。

ゴケグモ関連の展示写真は、1995年のゴケグモ発見時の新聞記事、セアカゴケグモが生息する墓地の様子、セアカが集中して見つかった関西空港の誘導灯探索の様子、TBSテレビやNHKクローズアップ現代へ

新海栄一氏出演・解説のスナッフ、談話会員による横浜搜索の様子、セアカゴケグモ(♀, ♂, 卵囊, 幼体), ハイイロゴケグモ(♀灰色型, ♀黒色型, 卵囊), クロゴケグモ♀, アカオビゴケグモ♀[谷川明男氏写真], ジュウサンボシゴケグモ♀, それに公園のベンチの下や工事中のコーンの下などの生息地点です。

私はハイイロゴケグモの黒色型を見たことがなかったので、これをクロゴケグモと見誤ることはありそうだと感じました。無毒のシロホシヒメグモにも黒型がいるそうです。シロホシヒメグモは最近、国分寺市周辺でも見られるようになってきたとか。

有毒グモ関連ではカバキコマチグモ(♀, ちまき状の住居), ハングツオスナキグモ(ゴケグモに間違われやすいが無毒), イソコモリグモ(大型のコモリグモ。無毒), タランチュラ(毒



展示会の案内ハガキ

が強いと誤解されているイタリアのクモ)の写真が展示されていました。

外来種として展示されていたのは、クロガケジグモ、卵をくわえたイエユウレイグモ、オダカユウレイグモ、シロホシヒメグモ、マダラヒメグモ(♀と網)、卵をくわえたシモングモ、ヒトエグモ、チリグモ、アダンソンハエトリ、アシダカグモの写真です。外来種を「物流に伴って」日本に侵入して来たと思われるクモと定義していました。クモは気流に乗って飛来してくるので、どれもこれも外来種になってしまいかねません。これらのクモの移入時期は遣唐使のころ(イエユウレイグモ、シモングモ)、1549年ザビエル来日のころ(チリグモ、アシダカグモ)、朝鮮出兵のころ(いまだに京都・大阪・奈良にのみ生息に限られるヒトエグモ)、江戸時代に出島を通じて(アダンソンハエトリ)と推定されていました。また、記録が明らかなものでは、1950年代(シロホシヒメグモ)、1981年(オダカユウレイグモ)、1982年(名古屋港に侵入。マダラヒメグモ)があります。特にマダラヒメグモは侵入後に高速道路が延伸するにつれパーキングに見つかるようになり、短期間に日本全土〔北海道と沖縄にはまだ侵入していない〕に拡大していったと新海栄一氏は語っておられました。この日、見学に来られた昆虫学者の須田孫七氏はアオマツムシと同じ様相だと指摘されていました。

こくぶんじ画廊は2015年9月に開設。国分寺市の文化発信の場として活用していきたいとのこと。5月か6月には目を引く色彩のクモの写真展を開催する構想もあるそうです。



こくぶんじ画廊入り口



新海栄一氏と池田
(背景はハイイロゴケグモ写真)

京都便り(4) 立命館大学から御室仁和寺

新海 明

今でこそ、滋賀県草津市にある立命館大学理工学部は、かつて京都の衣笠にあった。ここで、吉田真さんが主催するクモゼミが毎月1度開かれるようになったのは、クモ学会大会がここで行われた翌1983年のことであった。吉田さんからの手紙でゼミのことを知った私は、早速このゼミに加わることにした。

初参加の折に、京都駅からバスに乗り、下車したところは立命館大学の正門でなく、東側の別の入り口だったようだ。前年に訪れていたはずの理工学部棟が、どのあたりだったか全くわからなくなってしまった。付近の案内板を見ながら構内をうろついていると加村さんに出会った。加村さんはまだ京都府立大学の学生だった。彼に案内されて吉田研にたどり着いた。京都までわざわざ出かけるようになったのは、ゼミに加わることが第一だったが、ここの蔵書にも惹かれたのだ。立命館大の生物学教室にはクモ研究者の吉田さんと、ハチを研究している遠藤彰さんが在籍していたのだ。クモとハチの研究者にとって垂涎の雑誌 *Psyche* がここには揃っていた。ゼミが終わると吉田さんをお願いして、この雑誌のコピーをもらったものだ（なんと、すべて無料でコピーしていただいた）。この文献を利用してさまざまな原稿を書き、ゼミのネタにもした。東京のクモゼミは終了後に飲み会となるのが通例だが、京都はそんなことがなかった。終了と共に流れ解散となることが多かった。しかし、1~2回の記憶しかないのだが、日和の良いときに付近の名勝を訪ねた。私が、印象に残っているのは衣笠にある御室仁和寺である。時は春。遅咲きの御室桜が咲き誇っていた。この桜は背丈の低い八重桜だ。境内には屋台が出ていて、御室桜を景色に甘酒を酌み交わしたように思う。

東京で桜に早緑の葉が混じりかけた頃になると、京都の御室の桜が気になる。五重塔をバックに雲のごとく広がる桜花を眺めてみたくなる。京福北野線沿いの桜のトンネルの桜は染井吉野なので、すでに盛りを過ぎてている。御室駅で下車すれば、眼前にあの巨大な仁和寺の仁王門が見える。京都のクモゼミで初めてここを訪ねてから30年余り。その後3~4回は仁和寺に通ったように思う。立命館のキャンパスは今もここに残るが、理工学部は滋賀に移り、吉田さんはすでに退職され、かく言う私も還暦を過ぎた。ゼミの度に宿舎を提供して下さった吉田宅で、クモ学会の現状に憤り、あるべき姿を篤く語った夜も幾度かあった。

今度の春に、吉田さんを誘って御室の桜に会いに行き、昔語りをするのも一興かもしれない。

オニグモ 蝶の告白)
加藤康子

ボクが君を好きだったこと
知った？
蝶は花のようではない
キミは花のようではない
くつきりとした輪郭の背中に
かすかに刻まれた秘密の暗号のようだね
森の木に足から秘の暗号のようだね
太からず細く首の
このボクがなぞに
それになによりもその
ありえないほどの頂面！
のっぺりとした美しい顔にはない
愛するもの魅惑の重大な要素はそこにある
キミはボクをつかまえる
ためらい勝ちに始まって
奔放な展開をとげるキミの行動は
ボクをがんで
どこだかっていそうに女の子に見えるけど
本当のキミはここにしかない
暗い朝の光をあびて揺れている
金色刺繍のようなキミ
たたんだ網をすうっと吸いこんだら
さあもうお帰り
隙間なるまどろみの国へ
キミの痕跡が影も形もない真昼の
ボクは傷も好き。

オニグモと風うさぎ（４）

加藤 康子

オニグモは空を見上げた。空には雲ひとつなく、頭上の深い青紫色の中に ぽっかりと月が輝いていた。風船はもう どれほどの距離を飛んで来ただろう。夜は半ばにさしかかろうとしていた。まわりの風景も静寂をまとっている。耳を澄ませば、流れる水の混じり合うときの ポコポコという微かな音までも聞こえてくる。川の縁に沿ってゆるやかに傾斜する流れが 落ち込むところ。そこで形づくられる小さな泡が、水流に巻き込まれてこわれるときの音なのだろうか。ずっと以前にも聞いた記憶のあるような戯れる水の音、ふっと気づくと耳に残っているという音だ。

涼しい風の行き過ぎる道では そよぐ草の影が、地面をやさしく撫でている。ところどころ、黄色い花をつけたオオマツヨイグサは夜の野を照らす灯にふさわしく、ほっそりと立っていた。

森に響くフクロウの音が少しづつ近づいて来たと思うと、また遠退いていった。じぐざぐと線を描いて 自分の縄張りを点検しているのだろうか、彼らは羽音もさせずに枝から枝へと移動する。

オニグモは、ぶるんと体を震わせると、八本の足でしっかりと網をつかみ 思いきり息を吸いこんだ。ひんやりとした夜の空気が、気門を通して肺を満たし、血管の中に混じって足先まで伝わってくる。

「おなかがいっぱいで、何事もなく夜が過ぎ。穏やかな朝がやってきたとしても、こんなに良い気分になれることはないと思うわ」

風ウサギは振り向いてオニグモを見た。

オニグモは思わず「ニッ」と笑った。

この世界に生きる生物の四分の三は虫達だという。あの密生している緑の葉の下に、川辺の石の陰に 土の中にも彼らはいる。たとえどんな虫であろうと、無駄に存在しているものなんていない。全体を見渡せば、人も動物も虫も切り離すことのできない自然の息づかいであり、いくつもの季節を重ねた年月の果て、遠い未来のいつかは、形を超えた堆積物となって池の中で一体となるだろう。

小さなうさぎ、さらに、小さなクモの心に湧く喜びと共感が、どこかの窓辺で眠ることもせず、もの思う人の、その心が求めている安らぎや幸福と、もしかして同じようなものかも知れないと想像できるならば、野原や森の道での「小さきものたち」との出会いは、どんなに興味深く楽しいことになるだろう。

通信原稿投稿先：谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tknw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4月末まで、8月末、12月末です。



☆

川のほとりに、こんもりとした木立が続いていた。中央に大きな白い建物がある。いくつかの窓にはまだ明かりが点っているようだ。風うさぎはその建物に向かって風船を進めた。

「あの林のむこうに見える家はね、病院として建てられたものだよ。大きくて立派だけど、あの中には、病気になった人や、怪我を負った人達がいるんだ。それを看護する人や治療する人もいて。夜のあいだも眠らず見守っているらしい。だから病院の灯りは消えるってことはないのさ。それにね、あの病院にはお腹に赤ちゃんの入っている人達もやってくる。みんなで集まって、赤ちゃんが無事に生まれてくるように手助けするってわけなんだ。ぼくたち動物とは大違いだね」

上から眺めると、病院は青い夜の海に浮かぶ大きな船のように見えた。周囲の木立の暗い影を押し除けて、今にも動き出しそうだ。白い壁には四角い窓が整然と並び、部屋の明かりは絞られて、人々は夜具にくるまっていた。黙々と時間を過ごしているのか、眠っているのかもしれない。

ところどころに白く光る窓があった。数人の若い男女が白衣をひるがえして忙しそうに行き来している。彼らは看護師や医師なのだろう。見るからに撥刺として、夜半だというのにつかれていますようすはなく、動きにもよどみがなかった。

風うさぎは建物に近づき、白い壁づたいにゆっくりと風船を進めた。そして、最初の角を曲がったときだった。オニグモの足先に、川からの水音や風音をかいぐって何か伝わってきた。それは波打つような声で、歌のようではなく、何かを訴えかける張りのある響きで始まり、甘く余韻を引きながら、同じように何度もくりかえされている。

こんな声をオニグモは今まで一度も聞いたことがなかった。風うさぎを振り返ると、彼は臉を大きく見開いて、明かりの点る一つの部屋を見ていた。そして、突然、はっ！と気づくと 勢いこんで叫んだ。

「赤ちゃんだよ！ ほら あの窓を見てごらんよ。赤ちゃんが生まれたんだよ。真っ白い風が吹き出てる」

窓辺に赤ん坊を抱く人がいた。新生の赤ん坊は顔を真っ赤にして全身を震わせて泣いている。「ああ なんてことだろう。非の打ちどころないってこういうことだね。あのような無垢の白い風は新生児だけが持つと言われてる。この世に生まれ出てきた驚きもすごいけど、全身を自由に動かして、きっと嬉しくてたまらないんだろうね。こんな眩い風をおこすんだもの、できることならこのままずっとずっと見ていたい気分だ」 風うさぎは赤ん坊に引き寄せられるように、風船を近づけて窓のまわりでグルグルと回転させた。

オニグモにはやはり「無垢な白い風」をどこにも見つけられなかった。しかし、生まれたばかりの赤ん坊の泣き声の波動は、まわりのすべての音にも負けじと力強く、人間として生まれたことの誇らしさに溢れていると思った。その上に、自分達 虫の心にも届く生きものらしい生存本能と、どこかに野性さえも抱えている泣き声に聞こえた。

やがて、看護師によってきれいに洗われた赤ん坊は、待ちわびる母のもとに運ばれた。母親は胸を開いてやさしく抱きしめ、うっとりわが子を眺めた。そして、小さな赤い唇には、温かい

初乳が与えられた。

☆

風うさぎは、ぐるりと病院をひと廻りすると川の上に風船を戻した。彼は深く息を吸いこみ、ゆっくりと吐き出した。目の前の草のあいだを縫って、発光しながら飛び交うホタルの群がいる。淡い緑色を点滅させて集まり、誘いあっているのだろうか。音のない幻想的な光の舞は、一瞬のゆらぎとなって水に映り、さざめいては消えてゆく。

それを見ながら、オニグモも風うさぎも、いつしか物思いにふけていた。過ぎていった時間のなにげない出来事や、ふっと心に浮かぶことのひとつひとつを 反芻する。それは、行きつ戻りつしながら道すがら空の雲を眺め野の花を摘む散歩にも似ていた。

「何だか 父さんや母さんのこと思い出しちゃった」

少し照れた表情で 風うさぎはオニグモに話しかけた。彼は人間の赤ん坊の誕生に遭遇して、落ちつきをなくした自分を気恥ずかしく思い返していたのだ。

誰でも 時には我れを忘れてはしゃいでしまうことはある。だって この世は不思議なことだらけだ。偶然の出会いには新しい物語を生み 謎は深く深く追い求められ、夢は創造の種となる。皺々とした乾涸びた小さな種も、いつか美しい色彩の大輪の花を咲かせるだろう。

「そう 私も母さんのこと考えてた」

オニグモは風うさぎの気持を推しはかって言った。

「でも私は母さんがどんなオニグモだったのか知らないわ。みんなで卵の袋から出ていたときには、もう母さんはいなかったから・・・ただ卵の袋には、かすかに母さんの気配のようなものが残っていて、それを、ぼんやりだけど今でも思い出することができるの」

「ボクは 母さんの胸についていたハコベヤクローバーやヤグルマギクの匂いを覚えてる。ふわふわした母さんの胸に鼻をうずめて、その匂いをかぎながら、弟や妹と押しあい押しあいし、じゃれあいながら、眠りにつくんだ。そんなときはいつも 母さんは前足でみんなを抱いて やさしく撫でてくれたものさ」

風うさぎは鼻をひくひくと動かして 生い繁る夏草の匂いをかいだ。

川は ゆるやかに蛇行を始めた その上を静かに滑るように 風船は飛んでゆく。

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 〒258-0018 足柄上郡大井町金手 1099

E-mail : lbobef2100_ik@nifty.com

あるいは

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

Yahoo box ID kishidaia PW spider にアップロードして、その旨を谷川までご連絡いただいても結構です

キシダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。